

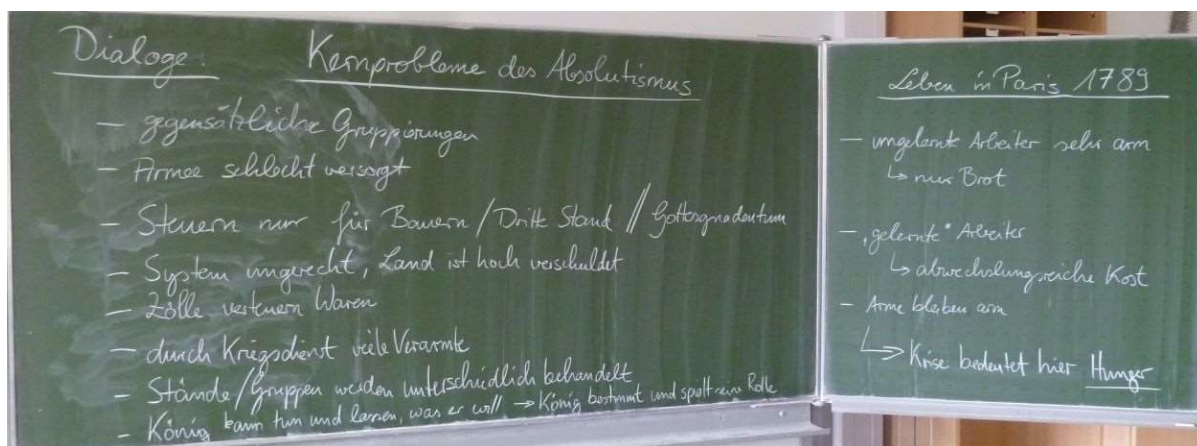
## 【ドイツ・前期中等教育段階：ハイコ・ボルテ教諭の授業】

(担当：服部一秀)

### 授業事例

OSTr Heiko Bolte：絶対王政（Absolutismus）に関する授業

(2022年11月9日，Carl-Friedrich-Gauß-Schule Hemmingen，第7学年)



### 1 事例紹介

ここで取り上げる歴史授業は、ドイツのハイコ・ボルテ教諭（OSTr Heiko Bolte）<sup>1)</sup>による絶対王政に関する授業の一部である。

ボルテ教諭は、ドイツ北西部のニーダーザクセン州ヘンミンゲン市<sup>2)</sup>にあるカール・フリードリヒ・ガウス・シューレ（Carl-Friedrich-Gauß-Schule Hemmingen）において、歴史の他、政治や宗教などを担当しており、社会系教科領域の主任も務めている。19世紀の著名な数学者から名をとる同校は、協力型総合制学校（Kooperative Gesamtschule）というハウプトシューレ・レアルシューレ・ギムナジウムの諸課程を有する学校であり、この歴史授業はギムナジウム課程の第7学年（前期中等教育段階）において実施されたものである<sup>3)</sup>。

ボルテ教諭によれば<sup>4)</sup>、コロナ禍でのオンライン形式による歴史授業において、生徒たちが過去の人たちの対話（Dialog）などを創作し意見交換する活動を通して、過去についての自らの理解をつくりだす学習が効果をあげた。歴史授業が対面形式に戻ってからも、生徒が自分自身で歴史を構成すること（Eigene Konstruktion von Geschichte）ができるよう、そのような活動を意識的に取り入れているという。ここで取り上げる2022年11月9日実施の歴史授業も、「絶対王政はどう評価づけられるか」というテーマで、生徒たちが当時の相異なる立場の人たちの絶対王政をめぐる対話を創作するという事前の活動を踏まえてのものである。近世の絶対王政に関する単元の最終局面において、宮廷生活、官僚制、常備軍、教会、重商主義など、さまざまな要素についての既習の知識を活用し各グループで創作した対話をもとに、絶対王政を当時のさまざまな立場から評価づけてみることで対象化すること、さらにそのような絶対王政における問題状況について統計資料の読解をもとに捉えることで、次単元の題材であるフランス革命とアンシャンレジームの崩壊に着目することをねらったのが、今回の授業である。

### 2 授業の概要

授業は、途中の小休止を含め、約90分で実施された。大きく前半と後半の2つのパートに分けることができる。時間的には前半パートのほうが長かった。

### 《授業前半》

前半パートの中心は、「絶対王政はどう評価づけられるか」というテーマで生徒たちが事前に創作した対話を発表し、それらをもとに絶対王政をさまざまな視点から捉え返して評価づけることである。

ボルテ教諭は、6つのグループに対話を発表させていった。創作した対話を読みあげるグループもあれば、寸劇のように対話を演じるグループもあった。1つ目のグループは、商人、教会の信者、負傷した元兵士の対話を発表した。その主な内容は、裕福な商人と腕を失った兵士との対比であった。2つ目のグループは、家族を養うだけのお金がない農夫の妻と国王を高く評価している神父との対話を発表した。内容は、農民の重い税負担、王政の意義についてであった。3つ目のグループは、元兵士の老人とパン屋との対話を発表した。輸入品の関税と国内の物価について扱った内容であった。4つ目のグループは、国王、教会の神父、農民の対話を発表した。その内容は、身分による境遇の違いに関してであった。5つ目のグループは、農村の代表と国王の使いとの対話を発表した。内容は、税の値上げについてであった。6つ目のグループは、イタリアの商人とフランスの農民との対話を発表した。内容は、輸入品の高額さについてであった。このように、身分の異なる人たち、第三身分の異なる立場の人たち、また国を違える人たちの対話が発表された。

ボルテ教諭は、各グループの発表のたびごとに、その発表の内容、そこに映しだされている個々の立場にとってのメリット・デメリットや絶対王政の諸側面についてクラス全体に意見を求め、生徒たちと問答を繰り返しながら整理し、ポイントを黒板に記していった。

### (前半パートの板書)

対話： 絶対王政の中心的問題

- 対立化する諸集団
- 軍による供給は不十分
- 農民・第三身分のみの課税，王権神授説
- 制度が不公平，国は多くの負債を抱えている
- 関税は商品の値段を高くする
- 軍務を経て多くの貧困層が
- 身分，集団によって扱いが異なる
- 王は望むことをすることができるし，させることができる→王は自分の役割を決め，果たす

この後、ボルテ教諭は、絶対王政を全体としてどう評価づけることができるか、生徒たちに発言させていった。対話の創作・発表と共有・検討を踏まえ、絶対王政の諸要素・諸側面やさまざまな立場から当時の体制全体を改めて見つめ直し評価づける学習である。第一身分・第二身分・第三身分のそれぞれにとっての絶対王政、第三身分における相異なる立場にとっての絶対王政の評価づけに主眼がおかれた。

### 《授業後半》

小休止後の後半パートの中心は、1789年2月のパリにおける第三身分の都市住民の生活費に関する統計資料を読解し、それをもとに絶対王政における問題状況について捉えることである。

ボルテ教諭は生徒各自がまとめの記述を行う時間をとった後、絶対王政における危機を多くの下層市民の経済的な窮乏と結びつけて具体的に掴めるよう、教科書に掲載されている統計資料に着目させた。その統計資料とは、当時の熟練した職人と未熟練の作業員という第三身分の相異なる立場の人たちの生活費に関する円グラフであり、平均的な収入、支出の内訳が表されている。それらを各自がじっくり比較しながら読み解き、それぞれの家族がどのような暮らしをしていたか、そのような状況と

なっていたのはどうしてかを考える時間をとり、その上で多くの生徒たちに考察結果を発表させ、また生徒たちと問答をしながら、ポイントを黒板に整理していった。

(後半パートの板書)

#### 1789年のパリにおける暮らし

- 未熟練の労働者はとても貧しい
  - パンのみ
- “熟練した”労働者
  - いろいろな出費
- 貧しい者は貧しいまま
  - 危機とはここでは飢えを意味する

生徒たちの発表をまとめていった上で、ボルテ教諭は貧困層に注目させつつ、危機的状況やその深刻さと解決の展望を問い、アンシャンレジームの行く末について生徒たちに考えを述べさせ、本単元を終えた。これを踏まえて次單元では、フランス革命とアンシャンレジームの崩壊について取り上げることになる。

### 3 授業の特質

本授業の大きな特色は、生徒たちが既にもっていた過去についての理解を用い、史実に基づきつつ、当時の相異なる複数の立場の人たちの架空の対話を創作し、視点を複数化することにより、既存の理解を再構成すること、生徒たちが創作した対話を発表して意見交換し、視点の複数化をさらに進めることにより、自らの理解を再々構成することである。

歴史授業において特定の1つの視点のみから過去の事象について取り組ませれば、生徒たちにとってはシンプルでわかりやすい反面、それによって得られる過去についての理解は偏ったものになってしまう。例えば、絶対王政に関する授業の場合、宮廷生活、官僚制、常備軍、教会、重商主義などを国王の視点のみから扱い、いかにして国王が絶対王政を確立し維持・強化したかを辿るとすれば、生徒たちの理解は単に国王を英雄視し絶対王政を肯定視するだけのものになってしまう。尤も、さまざまな視点から過去の事象に取り組ませることは、過去についての理解のためには必要であるけれども、生徒たちにとってはけっして容易ではない。それをどう実現するかが課題となる。

ボルテ教諭は今回、少人数の個々のグループにおいて当時の人たちの対話をつくらせたが、それは同じ立場の人たちの間の対話ではない。立場が異なり利害が対立する人たちの間の対話をつくらせた。そうすることで生徒たちが自ずと絶対王政に対する視点を複数化できるようにした。また、各グループに対話を発表させ、そのたびごとに意見交換させることにより、生徒たちが絶対王政に対する別の立場からの新たな視点を獲得し、視点をさらに複数化していけるようにした。各自が視点の複数化を進めつつ、自らの既存の過去についての理解を何度も見直したり、作りかえたりし、複眼的な見方(Multiperspektivische Sichtweise)に基づく絶対王政の理解をうみだせるようにしたわけである。だからこそ、その後に生徒たちがさまざまな側面やさまざまな立場と結びつけて絶対王政の体制全体を見つめ直し評価づけることで自らの理解をまとめることが可能となったのであろう。

確かに、生徒たちがつくった対話は、“もしも、当時、AとBとが話をすることがあったとしたら、どのような話をすることになったでしょうか”というアプローチに従って創作したものであり、対話それ自体はフィクションである。とはいえ、生徒たちはそうした対話をつくったり、それらの対話をめぐって意見交換したりすることにより、自らの内に相異なる複数の立場をつくりだし、さまざまな立場にたって過去の社会状況に向き合うことができる。そうして各々の立場にとっての当時の社会状

況を対比したり関連づけたりすることは、生徒たちが多重視点に基づく過去の理解を自らうみだすことを可能にしうるものであり、その教育的効果は大きい。

勿論、そこで史実が蔑ろにされてはならない。過去の人たちの対話をつくるためにはその人たちの立場やその人たちがおかれた当時の社会状況についての確かな知識が欠かせない。そこでこの授業は、生徒たちがそれまでに学んだ絶対王政の諸要素についての知識を総動員して取り組めるよう、絶対王政に関する単元の最終局面に位置づけられている。また、対話の創作作業、発表ごとの意見交換においては、史実に関する誤りがあれば互いに正すことも意図され、発表された対話に映しだされている絶対王政の諸側面についての確認も丁寧に行われた。ボルテ教諭は生徒たちの創造性と歴史上の事実とを両立させることに留意していた。

このような歴史授業は、日本の歴史教育の文脈上では、とりわけ小学校の第6学年における共感的理解に基づく歴史授業を改善していこうとするとき、大いに注目すべきものではなかろうか。人物中心の共感的理解は、特定の立場にたつことでその立場にとっての問題や問題解決を他人事としてではなく自分事として考えることを可能にしうる。とはいえ、それだけでは単眼的な見方による偏った理解に留まり、緩やかであるとしても無批判的な政治的判断の教化につながる。共感的理解を一旦可能にするとしても、それだけで終わりにせず、そのような単眼的な見方からの脱化をどう実現できるかが課題となる<sup>5)</sup>。視点の複数化とそれに基づく複眼的な見方による過去理解づくりに向け、ボルテ教諭のこの歴史授業は1つの可能性を示していよう。

## 註

- 1) ハイコ・ボルテ教諭は、上級の教諭である Oberstudienrat (OStR) である。
- 2) カール・フリードリヒ・ガウス・シューレのあるヘンミンゲン市は、ニーダーザクセン州の州都ハノーファー市の南側に隣接する市である。
- 3) ニーダーザクセン州ギムナジウムの歴史では、第7・8学年段階において、「近世の王侯国家」、「市民革命の時代（イングランド、北アメリカ、フランス、1848年など）」、「19世紀におけるドイツ国民国家の歴史（縦断）」、「工業化と社会的問題（日常の労働生活、児童労働、さまざまな解決策など）」、「エネルギー利用の歴史（縦断）」、「19世紀における帝国主義」、「第一次世界大戦」について取り扱うこととなっている。Niedersächsisches Kultusministerium, *Kerncurriculum für das Gymnasium Schuljahrgänge 5-10 Geschichte*, Hannover, 2015, S.21.
- 4) 授業後、同校内において、筆者がボルテ教諭より聞き取りを行った。
- 5) 木村博一によれば、そのような授業実践を日本の小学校歴史教育においても僅かながら見出すことができる。佐藤健教諭は2000年、広島大学附属東雲小学校の第6学年における聖武天皇の大仏づくりに関する授業において、「《天皇の側》から見た劇をつくる班」と「《農民の側》から見た劇をつくる班」とに児童を分け、シナリオづくりに取り組ませた。児童たちが班によって相異なる台詞を何度も吟味しあうことで、大仏づくりについての偏りのない理解をうみだすことができたという。木村博一「子どもが追究する社会科授業」、社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ—変革と提案—』、明治図書、2003年、pp.136-144。

なお、この佐藤教諭の授業の場合は、教師が劇の主役となる立場について方向づけているが、ボルテ教諭の授業の場合は、対話の登場人物の立場について生徒に委ねている。どちらがよいかは一概には言えず、教師のねらいや児童生徒のレディネスに応じて選択されることになろう。ボルテ教諭はこうした生徒たちの創作による学習活動をこれまで何度か行ってきたことから、複眼的な見方に基づく過去理解づくりを生徒自身が興味関心をもつ立場の選定からスタートさせ、より主体的に遂行できるようにしようとしたのであろう。